

蜀
館

上
二
五
六

一

仁和寺のあはれ法師の年よりぞ
かみなるアはサスル
うい 族ウイ



仁和寺のあはれ法師の年よりぞ
もぢわかれがうくそそあはれ時思ふさそぞ
あそあうらうわもうてきわ極楽ちのさうら
あそあうらうわもうてきわ極楽ちのさうら
乃人あひて平比思ひつゝとさうちち
はすささたううこさあうされうもさ
さう人さうさうのさうさうさうさう
ゆうさうさうさうさうさうさう
ちひてさうさうさうさうさう
れさうさうさうさうさう



仁和

寛平元年乙未四月八日

足利也

石清水

貞観年中に和州大安寺に僧行

教筑紫宇佐八幡

ありし時大菩薩を

よんで

海城小

我より行て

みを獲

んと行教を著して奇異に思

ひをたり都ふのころ時山崎小刻つる夜又

後に我よりいふをんとし乃終るるなり

東国男山鳩

鎮ふ人なり光あり行教すれ

しる巻ありて勅使をさしと字はと

あふも勅使ありし神皇正統記公事根源

元亨釋書等に記しあり

からりて徒歩り也

極樂寺

八幡宮護國寺別當安宗開山也縁起云大安寺傳燈

大法師位安宗謹言伽藍壹院号曰極樂寺

在山城國丹波郡村手山里石井寺

奉為石清水八幡大菩薩

三所君達梵天帝釋天神地祇無師

僧父母六親眷屬三有法界有識無識皆悉為令往生極樂淨

土以去元慶漆年始所建立也安宗者行教和尚之弟子也

高良

武内宿称也日本紀云河内天武二年二月八日高

良託宣曰皇孫天皇御宇為景行天皇右之健將又

任武内神大臣孝元天皇五世孫也存官二百四十四年矣

九年但覺年月日不知之或云仁德天皇五十九年丁

卯薨或説サハ玉垂余也

かぐり かぐり也

是仁和寺法師の法師なるんとす名は

名はともいへり醉て鼻入あまは傷らふ足具を

ぬて頭おろすこれよりやうにしろは鼻をぬけ

ぬてふを指して舞あらふ由は鼻入といへる也

がうぞはぬんすにふは指れと酒宴といふ也

いづいんともいふはあはくといふははびの

はらりきとぬはたぬはなもいふらて鼻は

まうられあはんとはれぬむすといふははび

びはそきうぐちあはれぬはぬはぬはぬは

て三思かりつれといふはぬはぬはぬはぬは

まひは杖をつきまきあはくといふはあみそ

ひら道すがら人れあはくといふは事限る

師なりといふはあはくといふはあはくといふは

そまやうなわけのあはくといふはあはくといふは

ひはあはくといふはあはくといふはあはくといふは

まへあはくといふはあはくといふはあはくといふは

[illegible]

風流リウのしらべやうた
如きと讀よへし

人々縁よひて、本生心地觀經八心、如流水、念之生滅、於前後世、不暫住、故心如大風、剎那間、歷方所、故心如猿猴、遊々欲樹、故心如飛蛾、逐燈色、故心如野鹿、逐假声、故心隨萬境、轉々所實解、幽

了すり、ゆるるゝあわ

貪欲、わろし、法華經、諸苦所因、全具、欲為

若、成貪、故無所依、地

紙、衾

一、種、乃、うけ

事、文、類、聚、前、集、僧、

守清、禪師、如何、是、和、尚、家、風、早、瓶、兼、一、鉢、到、所、是、天、涯

あ、ぶ、れ、あ、つ、の、范、堯、夫、布、衾、銘、藜、藿、之、甘

綿、布、之、温、名、教、之、學、徳、義、之、尊

六、韜、鹿、裘、御、寒、布、衣、掩、形、新、果、之、飮、藜、藿、之、義

げ、ほ、れ、道、を、ひ、く、ん、た、あ、ぬ、の、道、は、字

み、な、ほ、せ、と、あ、ま、の、な、は、た、し、う、ん

れ、道、の、う、ま、を、善、提、と、あ、げ、り、か、あ、り、那、

夫、佛、道、を、求、む、る、山、林、の、も、布、衣、に、う、ま

ら、ぶ、ん、の、う、ま、へ、し、う、ま、あ、れ、び、や、う、

たりあふと人れたを須臾もとれりや魚の
 水をこれとてとるも。河川をこれとて
 すて男女をばらるも。世に海にるも。山林
 なるも。麻實枯槁あるも。人倫をいも。人倫
 絶ゆるも。禽獸とて兼好な世俗を畜類と
 してと儒よりいふれば。世にのびて。人倫を
 みたり。若く禽獸とて道に入るも。人倫と
 道をひろむも。いかに人倫するも。えん
 是孔孟の異端をもとるも。て昌黎の家
 法なり。

大事を成るひに人々もあつていふもあつて
 一ものないを遂にせしめられしはあつて
 事いへばあることか事にはいへばある
 け事人の業あるに末種にあらはれし
 て年すしあつていふもあつて事待て
 一ものないを遂にせしめられしはあつて
 事いへばあることか事にはいへばある
 け事人の業あるに末種にあらはれし
 て年すしあつていふもあつて事待て

いふがはくくんといふれははらきとてあはれ
きとてくくんのつらきなり。あはれ人をいふ
うはにきききききききききききききききき
るがはくくくくくくくくくくくくくくくく
きききききききききききききききききき
きききききききききききききききききき

大事をたしむるなり

法華經方便品。世尊唯以一大事因緣故出現於世。

水火けきききききききききききききききき

孟子豈有他哉。避水火也。如水益深。如火益熱。

ききききききききききききききききききき

る。せききききききききききききききききき

終時不随者。とてきききききききききききき

出る。ききききききききききききききききき

ききききききききききききききききききき

も。きききききききききききききききききき

ら。きききききききききききききききききき

卷之三

眞乗院ニ威親僧都と云ふなり

此等物ミシコウスハ全ク
功効ナドト云フヲ述ブ

そらあふとふ物をみまはたけい

多^タク^ク。義^ギの^ノ産^{サン}を^ヲ以^モて^テ。世^ヨに^ニ好^スむ^ヲ。神^{カミ}よ^ヲ。ぶ^ツぶ^ツく

Handwritten text in Arabic script, likely a continuation of the previous page.

みくらづふとまふし廿日二十回を瘰癧治す

て
驚き
み
~~あ~~
う
ま
い
ち
な
え
ひ
て

おほく食ふ美は病を争ふ人よ

事物はひらきなりそひなはあなを

志^ニ方^ニ歸^ニ還^ニ乃^ニ丹^ニ内^ニに^ニ錢^ニ二^ニ百^ニ貫^ニを^ニ貯^ニ

ちんをゆづる海防を百費より

皮^わ是^こ三方^{さん}丈^{じやう}を^を一^い匹^{びつ}乃^のあ^あわ^わら^らふ^ふて^て衣^い

一五、錢十文、二當口

人あつてこそ十景なるを草紙を

三ノ下

くそあみまゆふるも二百貫の地と

はくちやまのくわい

遊さるる者ありとぞ。人下けりけし儀あり。

法師（親白）うそふとふ名はけふ

親、白クテ

つとむるに
人の心を
かへし
我

もきほろもあまのる
 じのえよ
 ば後より心法師ノイマ指シテ
 ナク

我といふは此僧部キリヤウカヨナテみありかほくぞ

以俟上或心匠師、下指

キリヤウカヨシ

卷之六


搬上

學問加下

トモに

自由

三


 平常より
 用とるなり

改まり多し

食ニ又タカニ至テ非
 時ニ食フテニ賜キト云

も人よむとく定てくふくくくくくくくくくく

丁未

いふ事あり人のいふ事

道にあらぬ我夜ふくみ

ロニテ笛ヲ吹キナガラニテ

新事我依之が元シテ后クフダ

五

古
一
一

盛親僧

芋頭 ^{イモ} ^{カラ} 芋魁 ^{イモ} ^{カラ} もつて

鑄を粒と云ふ也

こいかなまゆが
まろくゆわらふまの

うゑ云義あり

法燈 佛法を燈ふ事也。佛燈は燈
なごころふしげ義あり

これいじ 佛家にはふい合して日中と
てて物をくらぶ或一人の何れありて一ふれ
有飯をくらふふれ佛ゆりて眠り
又くらむを時とて四時律より
つげ候國親傳部のいづるをのみみ
てくいつ事なりふりありもにらむ
あり

編年通論十八云。南嶽明瓚禪師者不知何許人

初宰相李泌。乾元中。辭入衡岳。瓚隱居上封。泌往謁
之。瓚誦經。且言先悲懷而後悅豫。泌雅知音。因謂
曰。將非避隱者有雲霄意乎。瓚嘆之曰。莫相賊。莫相
賊。必色不為動。瓚久見泌。立候不懈。乃曰。飯未。泌曰。
未也。瓚撥火出。食。泌與語久。辭去。瓚撫其背曰。
好做十年宰相。至是。泌用事。為帝言其高行。有
詔徵之。使者至石。居。宜麻。命曰。尊者起。謝恩。瓚
笑。涕垂頤。疑坐。略不以介意。使者歎其淳正。不之迫。
回奏其事。帝次。義。數四不色。瓚嘗著歌曰。飢寒
喫飯困。來即眠。思人笑我。智乃知。為。小是。痴。執。系。

體如然。要法即去。要住即住。

東坡七云。他年記此味。芋火對懶殘。唐李泌与

明瓊禪師遊明瓊。教徒謂之懶殘者。懶殘性懶。

而食殘。故以為号。事見高僧傳。

即月江資懶殘云。芋魁後世價連城。

遵生八牋六。高瀛冬時暹賞雪。夜煨芋。談禪。雪。

夜偶宿禪林。從僧擁火。旋摘芋。煨剥合味。較市中。

美甚。欣然一飽。因問僧曰。有為是禪。無為是禪。有無所

有。無非所無。是禪乎。僧曰。子手執芋。是禪。更從何問。余

曰。何芋是禪。僧曰。芋在子手。有耶無耶。謂有何有。

謂無何。無有無相滅。是為真。而謂空非空。空無所

空。是名曰禪。執空認禪。又着實相。終不悟禪。非精

進力到得。惠根緣。未能頓覺。子曷觀芋乎。芋不得

火。口不可食。火功不到。芋不生。須火到芋熟。方可就

齒。苦消滅。是後有也。敗無。芋非火熟。子能生嚼芋乎。

芋相終在不滅。手芋嚼盡。謂無非無。無從有

來。謂有非有。有從無滅。子手執芋。今看何處。金時

稽首慈尊。禪從言下喚醒。

木二木一五五

盛親僧都のふもといふ誠は凡人にあらず。

懶^{ラザ}殘^ニの似^ニうる錢^{ゼニ}ニ方^シ止^キを辛^{イモ}郎^{カラ}の價^{アタヒ}よりうへ

あかしの芋火をうろひて李^リ泌^ビは逢^ヒ鼻^ビ涕^テを

勅使より異なり

いづれは福むいづれは書^ひと眠^みたか

彼飢喫困睡ハ同ニ宗ニ法ニ灯ニるル後カ

嶽頭一生禪にまゝしむるが如し

無欲乃人也。多欲。猶頭虱子布袋政。

黄牛端獅子の妻も又三子

佛座のてに鐘落しをきくまはれり
 皇居様ノ御座故所ノ書ナリ
 二十

醴
フカシ道具ナリ
米ヲフカス器ナリ
是ハ焼物ヲ以テ

制衣し夕々アリ



燒物製衣



通子敷

子胎中ニ移テ居ルヲ
子數ト云フ耶胞ニ衣ナリ

古々

法座の時う義落しと
新家地

中^{ナカ}ニ云^{クモフ}后^{サシ}に立^{タテマツル}度^{トキ}の時^{トキ}所^ゴ展^{テン}け様^{ヤマ}より罷^{コミギ}て轉^{マユリ}

子事^{コト}を^ヲう^ルわ^ニ皇子^{タヂ}に^ニ誕生^{タマハ}し^{マシ}ぬ^ニ南^{ミナミ}（落^{オト}）

魚好^{イサカミ}が^{コキ}逆^{サカサマ}落^{オチ}す^{コト}も^ナ何^{ナニ}家^カを^ヲ後^{ノチ}を^ヲ引^{ヒキ}て^テ考^{カウ}合^{カフ}
と^ナう^ナず^ナめ^ナい^ナう^ナぞ^ナう

延政門院は清盛朝院の御子なり
此時年五十五

延政門院も美好なりありとて陰人

と^ナり^ナ人^ナと^ナら^ナう^ナと^ナて^ナト^ナ留^ル給^スな^リう^ナ御^ミ
神^{カミ}なり^{ナリ}も^モ一^{ヒト}の^ノ角^{ツノ}なり^{ナリ}一^{ヒト}の^ノ通^スなり^{ナリ}
い^ハみ^ミぬ^ヌと^ナう^ナあ^ハた^タな^ナゆ^ユる^ルい^ハく^ク思^モい^ハ
ま^ハい^ハと^ナう^ナも^モあ^ハわ^ハ

延政門院は清盛朝院の御子なり


い^ハみ^ミぬ^ヌと^ナう^ナあ^ハた^タな^ナゆ^ユる^ルい^ハく^ク思^モい^ハ

あ^ハつ^ツひ^ヒな^ナき^キひ^ヒと^トあ^ハり^リと^トい^ハふ^フの^ノ事^{コト}
さ^ハい^ハふ^フに^ニあ^ハり^リな^ナい^ハ事^{コト}は^ハあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ
あ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ幼^{コウ}少^{セウ}な^ナら^ラぬ^ヌ事^{コト}は^ハあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ
し^ハと^トい^ハふ^フは^ハ明^{メイ}魏^{グイ}法^{ホウ}師^シに^ニあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ
り^リと^トい^ハふ^フは^ハい^ハふ^フに^ニあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ
い^ハふ^フは^ハあ^ハり^リと^トい^ハふ^フは^ハ事^{コト}文^{モン}類^{ルイ}聚^{ジュ}引^{イン}白^{ハク}氏^シ
文集注云鄭玄家牛觸牆成八字とあり牛は角
つとにありてそのあはの字はさうありと
うはの字をい牛の字はさうとあり

東寺一の長者我が坊より元日より行ひて
八日より七日の真言院より修しうおほは
七日よりや榛中元日より白馬の節會まで
公事多しゆつ。は門より八日より始り
あり仁明天皇の御大内中務省より弘法大
師。秘法を修し。より表をもちて。永代の
規式をさへんとし。いづるに。勘解由
司。此廳を改めて。より修し。えをさへ。今
真言院是也。八日は開白。十四日に結願。
當て大師請來れ。袖衣をも。是祖附屬。出
給をもちて。玉舂より。より。二張の香を。如
持して。灌子。より。又群臣に。灌く也。
阿闍梨。名義集。阿闍梨。或阿祇利。或阿底。耶。
唐言軌範。隋言正行。能糾正弟子行故。
二年の。此修中。年。れ。め。の。祈禱。修法
なり。に。誓。固。より。より。武。士。より。より。用。より。より。
貴事。一。歳。乃。相。より。より。ね。と。より。也。



天竺王 皇女を以て
 白雲天女とすハ七ツ端
 一ツ色ハ多クモハキ
 一ツ五ツ在り



輕乃五銖之必人よりなるに
つぎ

極官ニシテ五猪ノ車ニ乗ル也 大納言ニシテ氷節ニシテ大納言ニシテバ乗ル也 中納言ニシテハ乗ルス
ぞあは人なれ

車北五結

光緒

青^{アヲ}編^ヒ糸^{イト}五^イ緒^ヲ一^ツ

文
藍
革
綠

文三
小
革七
繪工

裏ノ縁ハ青唐綾

上緒不_レ革_カ崎_キ

車のみ法の事をも長閑キヤウゼウなへづのほれ
じちのづくとあそびはまうわ

此乃冠之

うらなうとあふ人
松をうけ
古代は

冠^ツ桶^ツをりらぬ人きこふはぞ今

用ゐし

冠桶と冠箱也。ハナリもげ物と葉子入と漆

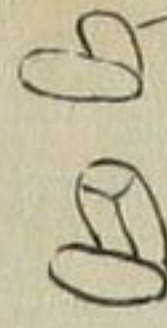
ぬちうお地まにあらんておの

内を錦^{三年}とてふ

くさつぎ 冠楠のくさつぎ也

本朝（せい）のようへ冠せ製法（せい）代りにしよう

不同^{フツウ}あはれも中^{ナカ}古^コより唐國^{タウコク}の衣冠^{イカン}とる



世の故に宋濂が日本曲に千年猶效漢衣冠冠の作もあつたなり

石林燕語余見大父家居及燕見賓客率多頂帽而繫勒帛於其服背子帽下戴冠簪以帛作橫幅約髮髮子親子入室中則去帽見冠簪或用頭巾也古者士皆有冠帽乃冠之貴制也頭巾賤者不冠之服耳勒帛亦有垂紳之意雖施之外不為簡背子半解武士服何取於礼乎或云勒帛不便於播弄故稍易背子然須用上襟掖下與背皆垂帶余不觀面見鞞軌接堂吏押父書於冠帽用背子今亦廢矣背子又引為長袖此半臂制也亦不同異賤者巾衣武士服而習俗之久不以為異古礼之廢大抵如此也

夏之彰象後集通天冠天子所冠後制也素礼无文祀天地明堂平冕鄙人不識謂之平天冠素色独新進賢冠古緇布冠儒者之服也前高七寸長八寸ウロコ後高三寸一圓下大夫命所服兩東再命大夫二千石所服三圓三衣上文文公侯所服三禮圖黃冠野王黃冠草服也郊特牲法冠曰柱後柱後高五寸以緹為展筓鉄柱夾執法者服之或謂之

五

武冠信謂

之^ヲ大冠^ト環纓^ニ无^ク縫^フ以^テ青絲^ヲ爲^リ紕^ト加^テ双鳴尾^ヲ以^テ左右^ニ爲^ス鶡冠^ト云^フ鶡者勇雉也故趙武靈王以表^ス武者爲^ス施^ス之^ヲ鳥^ヲ曰上

一、二
場三
雄四
ヲ五
双六

初冬
劍下

勝
二
信

しへ

知

ひ

三都

乃持

侍

に

六

13.

4

子





聖樹上野王

初雪^{ハコ}あゝ枝^エまゝに^ニ中^{ナカ}門^{カド}より^{ヨリ}あそひ

てある。大みさるのつゝいひて宮にあそつ

てあそびねの毛をさうあそびさう

二棟の所^{ところ}は高欄^{たからん}より勢^{いきり}の福^{ふく}をさうあそび

あそびさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

ねの毛をさうあそびさうあそびさうあそびさうあそび

毛にひく。是を新付也。一説云。
 下らん葉と云ふ也。年の内は枝を食さず。
 雄をたよあげて付て雌をさげて付て年の
 て雌とたよあげて付り。春は雌を貴
 ともおなや付やうは傳ふ。或は葉を用と
 ども。葉は梅秋は紅葉は付り事。常は義也。
 大は大雪の時。是を用ゆ。又初雪は雌と人
 にはるは付法也。又鷹野より人の
 つらとに。二四人の葉の枝と刀め付付し
 て本をおもひて付り也。一説を付りや

又四條大御言。隆親に説く。葉のつけお七人。雌雄

一説を付り也。又大長木。冬元。眼移徒。如。此。時
 用。之。唐。木。人。葉。は。根。ひ。ま。し。小。松。は。付。也。義。氏
 綱。目。説。鷹。野。より。人。の。と。雌。を。送。る。
 ち。葉。を。一。枝。と。も。萩。原。を。と。め。て。何。れ
 付。也。一。説。も。松。の。鳩。を。付。り。事。あり。山。鳩。也。
 義。家。に。朝。長。は。不。付。る。鶴。と。は。萩。原。の。枝。
 付。小。鳥。と。も。紅葉。は。枝。付。り。雀。を。何
 枝。付。り。也。十月。も。な。つ。ま。は。付。と。云

下野武久の説也。並見河海抄

下野武勝 續日本紀などにも下野國

下野國と云ふ家もて氏と云ふ

刀 本件よりいふに

さういふにさういふに刀と云

雪のあとに 初雪は我を跡をいふ

先づいふ人を待たれ

あはれいふの毛

花のいふにさういふに

ふみは武勝が花のさういふに

對てさういふ 伊勢物語に

かゝるさういふをさういふに

花のさういふに梅のさういふに

さういふにさういふに

さういふにさういふに

さういふにさういふに

さういふに

いづれに一年をわたりて
 一ト廿
 一ト廿
 一ト廿

洗^え月^{ツキ}新^{カハ}のう^うを^をろ^ろに^にと^と傳^トふ^フ橘^シ本^ホや^ヤる^ル水^{ミヅ}

花をさぐりし人のやうに幾人かありあり

貴位にまゐるに
ふりかへりて
なるべし
えりて

今出河原橋もと

苗れあをよみてむ此二の社の沸あけ水うそあそ

乃何はありて此の作文の序なりといふ

山本ハ。業平也。橋本ハ。増方也。

榎武 サガ
榎梁 ナリヒラ
榎子 ム子ヤナ

業平 三足彈正阿泥親主第五男也。故号存五中將女。

年月日
壬戌
三
近
將監
三
秉
和
守

四年正月補^{ラル}藏人^{クワトニカ}嘉祥二年正月七日^{ニヤウ}後^ニ五位下^ニ貞觀^{ニヤウ}

四年正月七日。後五位上。五年二月十日。元武衛^エ權佐^{ゴシノスケ}大

年三月八日。右近少將七年三月九日。右馬權頭^{ナニ}十一

年正月七日。正五位下。十五年正月七日。從四位下。元

慶元年正月十有。元近，權中將。十月廿一日，後四位。

上。二年正月十一日。相模權守。三年十月。藏人頭。四。

年正月土日。義濃權守。同廿八日。卒。年五十六。

天皇三年阿保親王上表曰。無良高岳親王。男。女。

先儒曰則直曰始臣之子直也引則始既為是才

姓在^マ京^{オリ}朝臣^{ハラ}業平^{トオリ}射^{ヒラ}兒^{テイ}閑^{ハウ}麗^{ミヤ}放^{ウツ}縱^{ハウ}不拘^{ビウ}畧^{テス}無^カ才^{ラホ}

學^{カク}善^{ヨシ}作^{ツク}和^ワ歌^カ評^{ツギミ}見^ミ三^ミ代^ト實^{ジツ}錄^{ロク}

五
糸
龍
大
臣
時
從
上
位
上

右中將西堡下陸奧守長德四年土
寶方月十三日於佐國卒

号一条

至
標原実方中將まで成一人也標中にて行

成せいてここわわるるそそいいわわるる冠かんを打う落おつつるる各お々が

依ヨて枕マクラを乃すなはて棄スれとて眞マコト列レキへははりて家イヘ則スナハチ

地々率。ち真西川下ゆるゆるせぬ

はるがわをめぐりてかれらのよきあひ

みくらをうろこみし。新古今。一糸院時。中將奥列を誦せし所古野の松をうろこみし。塩電明神の羽は形を現し。肯出飛奥列一國よりうろこみて二にせ。方馬にうろこみ奥列名をうろこみ島道祀神。乃前をうろこみ時下をうろこみ人のいひされ。あづま馬儀たをれて實方より死す。その社のうろこみにうろこみ雲化して雀となりて。王城よりうろこみ。あづま馬儀はうろこみ。うろこみ。

わろこみ

吉水和尚 法性寺関白忠通公子也。久壽二

年乙亥四月廿日生。法諱道快。養和元年十月六日。改名慈園。山より十二代座主。居東山。吉水。

禪元年九月廿九日。滅年七十一。法禪三年三月八日。後慈鎮。吉水。そのわろこみ。

月をめぐめ。めぐり。あづま。うろこみ。

今出河院近は。とあ河院。うろこみ。山院の后。常盤井相國實氏公。れ。中宮。嬪也。即而。園寺公相。公のわろこみ。弘安六年八月十三日。為。

尼^ニ文保二年四月十五日崩^{ホク}年^{ハシ}七

近^ニは^ニ近^ニは^ニ局^ニ也^ニ大炊^{オホクイ}門^{カド}度^{タク}流^{リウ}大納言^{オホノリ}伊平^{イヘイ}

女^メ也^ニ伊賴^{イライ}那^ナ覺^{カク}道^{ダウ}上人^{ジョウジン}實^{ジツ}伊僧^{イソウ}正^{セイ}る^ニの^ノ姉^{イモ}也^ニ

井^イ蛙^ワ抄^{セウ}云^ク近^ニは^ニ局^ニ九^ク歳^{サイ}は^ハけ^ケし^シる^ル厚^{コウ}氷^{ヒョウ}と^トい

あ^アを^ヲみ^ミ續^{シヨク}古^コ今^{イマ}と^トい^イる^ル五^イ代^{ダイ}の^ノ勅^{チク}撰^{セン}日^{ニチ}

を^ヲて^テの^ノ數^{カズ}も^モあ^アる^ル入^イ符^フさ^サる^ル作^{サク}る^ル無^ム作^{サク}

集^{シユ}に^ニも^モ入^イ佛^{ブツ}法^{ホフ}日^{ニチ}も^モ立^タふ^フ生^{セイ}不^フ老^{ロウ}の^ノ福^{フク}た^タる^ル

法^{ホフ}華^カ經^{キョウ}十^{ジュ}万^{マン}部^ブも^モな^ナら^ラば^バり^リく^クあ^アは^ハる^ルい^イは^ハる^ル

じ^ジ續^{シヨク}大^{ダイ}今^{イマ}の^ノ附^{ツキ}お^オ月^{ツキ}に^ニ葛^カ藤^{フドウ}童^{ドウ}に^ニ衣^イさ^サる^ルい^イは^ハる^ル

川^{カハ}後^ゴ中^{チュウ}宮^{ミヤ}と^トい^イは^ハる^ル橙^{ダイ}大^{ダイ}納^{ナツ}言^{ゴン}と^トい^イは^ハる^ル

新^{シン}拾^{シツ}遺^イ今^{イマ}あ^アは^ハ院^{イン}近^ニは^ニあ^ア恨^{コン}て^テも^モれ^レる^ル

ね^ネあ^アる^ルい^イは^ハる^ルい^イは^ハる^ルい^イは^ハる^ル

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

枕^{マク}上^{ジョウ}寒^{サム}五^ゴ

いそそ命をたもて戦ひて皆にへしてお利。
あつたふとそつと目比つたふとの路ももろ
人へかくきくひー路ふたふ人へへ問ふれ。
年々きふておまへへへへへへへへへへへへ
へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
まへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

押領使

東鑑云。鎮守府將軍。無降。鎮守府

五位上。藤原朝臣。秀衡法師。出羽押領使。基衡男。

同九云。泰衡。又治之。年十月。継父遺跡。秀出羽

鎮守府押領使。官領。郡。此。鎮守府乃押領使。

太極。和名。土大根也。和名。云。南雅集注云。苗。

和名。於。保。祿。俗。根。正。自。而。可。食。之。無。名。花。云。葉。服。上音。

本草云。盧。服。音。孟。說。食。徑。云。蘿。服。上音。羅。今。安。菜。服。上音。

皇朝類苑云。十八云。菜。足。中。莖。青。菰。芥。之。類。遇。日。干。

其。樣。多。結。成。花。如。蓮。花。化。作。龜。蛇。之。形。其。常。性。無。足。性。

者。熙寧中。李。賓。知。閩。州。園。中。菜。花。悉。成。荷。花。仍。各。

有一。佛。坐。于。花。中。形。如。雕。刻。莫。知。其。數。是。數。其。相。

依然。或。云。李。若。家。奉。佛。甚。篤。因。此。有。異。

書寫上人法華續補乃功はわして根淨
日く人々やわ様のあらざるに
巨乃くばうはてを意々するのつづき
を安んずるやわぬものもさうあり
我をいきてかきめはんといふわたり
あまのめはしきとさうをいふわたり
はしきやうにわたりわたりわたり
事々わたりわたりわたりわたり

書寫の上人

性空^{性空}平安城人位四位上橋善根

性空^{性空}平安城人位四位上橋善根
是就鳥嶺之下峯也居此者發菩提心得六根淨空至
山宿庵而問茶庵為席紙措為衣山鳥野獸來自
創寺曰圓教寺空山中每年三月轉法華為國
民之福增賀法師在多武峯求上紙空送之賀
歎息曰性空者其淨六根者歟寬弘四年三月十三日
誦法華而宋年八十元吉教書及撰集抄書有之

六根淨 眼耳鼻舌身意を六根と云

大豆れつをききて

世説曰魏文帝嘗吟

阿王曹植七步作詩不成者當行大法應生也詩曰

煮豆持作羹漉豉以為汁其在釜中然豆在釜

中漉者自同根生相煎何太急帝深有感也植

字子建魏曹操子文帝弟也

はほやち悲情のゆゑものをいひせおほく悲情

はゆは精氣をあらうとし是陳思王の豆其詩

みものうさ性空は六根海を引合とていふ

又莊子周兩の同各標社樹は夏語の

類曲ひひうさやゆせれ梅耶命が四禽言

東坡晦翁が五禽言山公禽語れ和合

も皆寓意の戯也無任法師乃沙石集を

えたりしに南都ある学生は坊のや

て蟻と蝸と言えり前後あれは蟻と云

何とて輪子ゴをもちわと云ふはふにふ

に輪子のふを得るお也省のこはそ

谷タニは似ゆつと蝸と云ふとて園子ゴをも

たふと云ふはふにふとて園子ゴは名は

ゆゑお也と云ふおぬツ業カは無任法師

にまゝうてそと傳つられ律リツ長ニはうと

元應
後醍醐天皇
應永元年
號多々

枕^{ミクラサシ}系^シ低^シ。玄上牧馬井^井。尹渭橋^井。魚名^{ミナ}るどあり。

人^{ヒト}不^フ知^{カモシ}之^ヲ掃^{カモシ}部^{カミ}頭^テ貞^{ヒシ}敏^{ヒシ}渡^ス唐^ス之^ノ時^ト所^ノ渡^ス北^ノ色^ノ二^ノ面^ノ其^ノ一^ノ牧^{ヒウカシ}繁^シ

条ト不信セ多。
 但シ世ノ甲コウ非ス只ヒト物モノ繁ニ祖ニ也。
 凡ソレ此ノ也。
 云イヒ射テイト多ヒト所ト。

不可說未嘗有物也。為靈物。人為跡。時有貴人如。

何跡ヲハミクニ云入人ヲ腎着直衣人也云

物中越他以不係手不可取昔無覆自近比有方

有^リ西^ニ復^ヒ并^ニ其^ノ臺^ニ也。紫^ノ臺^ニ曾^レ燬^ス也。其^ノ臺^ニ揭^ス也。形^ノ比^ニ已^ニ雲^ノ駢^ニ内^ニ裡^ニ燒^ス之^ヲ。
 之^ノ時^ニ飛^ビ出^ス擡^ス面^ニ文^ノ削^ス所^ノ々^ニ有^リ赤^キ色^ニ不^レ知^ス其^ノ繪^ノ代^ニ之^ヲ。
 有^リ河^ノ洛^ニ未^レ决^ス攸^ニ房^ノ云^フ良^ニ通^ス云^フ比^ニ也^ニ移^ス玄^ノ上^ニ彼^ノ擡^ス面^ニ。
 文^ノ不^レ可^ク透^ス彼^ノ唐^ノ人^ノ打^ス迷^ス形^ノ也^ニ或^レ云^フ玄^ノ象^ノ吞^ス青^ノ銖^ノ之^ヲ。
 水^ノ所^ノ謂^フ号^ス玄^ノ象^ノ又^ニ玄^ノ上^ニ宰^ノ相^ノ献^ス延^ス喜^ノ帝^ノ仍^ニ号^ス玄^ノ。
 上^ノ兩^ノ說^ノ也^ニ但^レ妙^ノ音^ノ院^ノ入^ス道^ノ付^ス玄^ノ上^ニ說^ス歟^ニ。
 古^ノ事^ノ談^ス云^フ牧^ノ馬^ノ与^ニ玄^ノ上^ニ双^ニ名^ノ物^ノ也^ニ時^ノ人^ノ不^レ并^ニ勝^ス方^ノ爰^ニ。
 有^ニ信^ス義^ス 時雅ニ信^ニ明^ス 博雅ニ兩^ノ人^ノ不^レ知^ス勝^ス方^ノ初^ニ信^ス義^ス彈^ス玄^ノ上^ニ。
 信^ニ明^ス彈^ス牧^ノ馬^ノ更^ニ無^ク甲^ノし^テ信^ニ明^ス彈^ス玄^ノ上^ニ信^ニ義^ス彈^ス牧^ノ馬^ノ其^ノ色^ノ。
 玄^ノ上^ニ故^ニ時^ノ人^ノ皆^ニ云^フ信^ニ明^ス之^ノ信^ス義^ス之^ノ上^ニ勝^ス牧^ノ馬^ノ之^ノ云^フ。

菊亭キクテイれたも
 ちち長ちやう萬ま年ねんも地
 ぢうをさうれたも
 柱ナタ字じ也やはらう
 琵琶ビバはらうといふ琵琶乃らう
 四ッありめうは師の琵琶れ柱あり
 さねづ
 衣キヌ被カシキとわう女メの事也
 けほタタひりて用もちつ田シメさめすへさうもなう。後い事
 みのんはさしづうや宮ミヤ町家チヤノ将軍シヤウケンれ附ツキの
 何ニれともやう同朋トウホウ。昼グハ軸チクをうさうせう

くらふ壁^{かべ}乃釘^{くぎ}をくらふとてんきれからせむた
 ちくるもくらふ用てほは軸^{うす}をじくしむらげ
 けとあつ人のたつたけをぬくむあむち
 ろ比^ひ人のくるもあは猿^{さる}樂^{がく}は山^{さん}伏^{ふく}のこ
 ちよあつゆのりなむとていへもあつていへ
 む珠^{しゆ}なむとてあつて懐^{ふく}の中^{うち}のあは数^{かず}
 珠^{しゆ}をぬきあはむらうちうちあはむらうち
 くらむあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 むはるん

名を常よりやそ面影の松はう海に地
 しくばえお時ひ又ひひと思ひはつあれ
 ちう人うなうれ荀拙袴をさきて下し
 比の人れ家のうに袴もそぞきうんこ受へ人
 しとんは人華もたひひとくく飛
 もくさうもや又ぬるうわうぞう人
 の云事し目日んゆり物も我んのうらも
 事れににむやうやあはくうらや
 出ひひも。うらうらうらうはなれ
 びうらうたうや

名をなすなり

熊儒登贈侯人詩。一見清容。慨慕聞有久傳。
是世陽君。

何やたがなり物なりあらるに調なれおほき。
硯に筆のあり。持佛堂に佛のたがき。
裁石草木のれは。家のうちには子孫にお
かき人よりひて。調なれおほき。頼又よ作善に
ほくをのそふ。たけりてんが。ねる又車
れ。調なれおほき。

調なれおほき。源氏物語。調なれおほき。
にも調度部。中下あり。佛僧具。調なれおほき。
具。武具。衣服。器。具。馬具。おほき。調なれおほき。
物具を載る。然し一切を調なれおほき。
ん。調なれおほき。源氏物語。調なれおほき。
お。裁石。草木。のれは。家のうちには子孫にお
かき人よりひて。調なれおほき。頼又よ作善に
ほくをのそふ。たけりてんが。ねる又車
れ。調なれおほき。

こゝろめづいてしまふもの。今何れも物としははら
例の悪好ぐこれめつた子。多し男か子則多し懼
とあらにふりてかくしつるるべ

然又、^本の文粹十三も、慶滋保胤の菅原
代然又、大に匡衡が熱田社の然又、三善道統の
大般若乃然又、おあまのいれをいふ

文車、^うはりい、^林中よりあり又あるもの
あり。失ゆるもの耐えやくいふらんをい用るわ

莊子云。恵子多方。其書五車。晉張華雅好書。

籍。其死之日。家無餘財。惟有文書。溢于机筵。嘗使

其為書。處則充棟宇。出則汗牛馬。

ちりほり、塵をうつるに也

世にあらはれてありし物と。これ物とほいひはら
福と。も中よたひてえんが。いふやいふ
また文法もわが文の母け例あり

詩七月篇。七月在野。八月在宇。九月在戸。十月蟋蟀入
我床下。張文潛曰。於七月已下。皆不道破。直言十月。方
言蟋蟀。非深於文章者。能為之邪。容有隨筆由。
莊子人間世云。澤雉。希逸口義云。本見若澤雉。

[illegible]

あゝ

血愛アイは海カイ無ム間カン源ゲン諸シュ類レイ取ク取ク

源氏物語みあるう国はうごめつとあり

わくれ 頑れ字也

うまうと 浮言も浮詞もあつとある

鼻れどあめそそ 源氏常木にあらはれり

たにめさくひうさる たりきとせんとるを

はよりく けり也

よき人のあやうきこととあると 論語述而

篇子不語怪力乱神

佛神のあつた者れ傳記 佛經ふたりの

しうふた佛菩薩鬼神の非変奇特又神明の

測かることぞかたがた化身れと人よあると

乃傳記ぞむと多うへ 皆いふつとある

めが

たにめ 鳴呼とあるとあると云儀也

蟻乃にありとありとあるとあるとあると

志はとありとありとありとありとありと

此にありとありとありとありとありと

るひにありとありとありとありとありと

やじめり。かばきりて何事ぞつら。期よる所
 ぞ。老と死とにあり。そのまゝ事遷よ。て念
 けり。に。まゝ。あれを。まは。あひ。何のた
 ひ。あ。ん。ま。づ。お。こ。れ。を。そ。れ。と。名。利
 目。お。ほ。も。て。先。途。け。ち。う。ま。事。を。づ。か。ん。ひ。バ
 ち。あ。ま。ろ。つ。ろ。う。人。の。ま。い。こ。れ。を。悲。し。も。常
 何。ん。ん。を。思。ひ。て。変。化。の。理。を。さ。づ。ひ。也

蟻はくくみあつまつて

父選。蟻同とぞ

豫章文集。夫。功名。と。會。蟻。蟻。一。世。其。与。蟻。正。亦。有
 辨。乎。白蟻戰。附。千里。血。黃。由。梁。炊。熟。百。年。付。何。成。名。

遂人間世欲夢槐安向北游

唐。杜。陵。子。夢。家。古。槐。樹。あり。酒。は。醉。れ。れ
 した。と。け。起。て。ぬ。り。て。を。り。ま。さ。ら。乃
 使。ち。も。ろ。く。槐。安。國。王。び。り。ま。の。夢。車
 ぶ。あ。り。槐。樹。の。中。に。到。り。の。穴。は。入。城。門。有
 其。額。を。大。槐。安。國。と。あり。殿。上。は。け。り。て。國。を
 に。海。も。王。ろ。ん。て。林。を。壻。て。金。枝。の。主
 を。妻。あ。り。と。け。り。富。の。事。も。さ。れ。か。ろ。う。あ
 柯。郡。に。乱。あ。り。ゆ。さ。な。さ。ひ。へ。と。夢。を。后
 ころ。は。車。馬。ち。も。に。み。ち。て。公。の。い。ま。さ。ひ

整頓上表六

高。是。も。ん。め。の。と。げ。も。陳チン翰カンが。太。槐タイ宮キョウ記キ。も。ん
 え。も。あ。今。は。ほ。ふ。人ジン間カンを。蟻セイの。あ。つ。も。う。に。あ
 え。も。う。づ。れ。う。い。さ。う。り。あ。う。あ。

變化の理を 莊子る已化生又化死生物哀之人類
悲之。浮物之初生本無而有又化而死則是既有而
無^{イナレム}乎一理而人物之類自以為悲哀愚惑^{オリ}也
は^ハ乃結^{ケツ}語^ゴも常^{ジョウ}に^ニ人々を思ひて變化
の理と云ふ^リ縁^ヰあるわどつる^ニ道^{ミチ}好^{カウ}え^ルる^ニ也
花^{サワビレ}より草^{クサ}あふ蝶^{テウ}とありて^ニ周^{シウ}なり^ニ事^{コト}と^ニし^テず

[illegible]

又、すゞてさ思つて轉れまゐるゝと
 匠房乃もあふも。是也。金剛經。一切有爲
 法如夢。如泡。如影。如露。示如電。應作如電。觀
 こゝにけり。いふ。いふ。に。常。恒。さ。お。事。を。く
 け。て。り。徐。雲。嶠。の。口。義。は。此。の。喻。觀。の。莊。子
 う。夢。蝶。の。こ。も。う。り。も。ゆ。れ。あ。い。つ。ぜ
 そ。ん。さ。し。め。り。も。め。莊。子。筆。は。か
 ま。て。た。げ。も。ゆ。り。又。す。で。に。化。て。生。ま。り
 化。て。死。す。り。を。思。ふ。人。の。海。ど。い。て。好
 ひ。い。ふ。化。蝶。の。常。に。あ。れ。ば。世。の。人。は。い
 お。う。も。い。ふ。言。は。葉。あ。ら。う。と。三。千。世。界。に。あ。り。ま
 じ。り。も。佛。の。力。余。と。い。ふ。は。い。り。好。い。と。い。ふ。
 又。有。無。常。新。の。四。見。を。さ。う。う。と。直。種。院
 法。と。い。ふ。終。り。は。四。見。の。も。佛。道。外。の。あ
 り。い。我。常。在。此。娑。婆。世。界。と。い。ひ。て。壽。命
 し。無。量。の。あ。れ。肉。眼。も。は。な。れ。佛。眼。の。と。い。ふ。は。
 世。間。常。恒。満。目。青。山。の。い。ふ。う。輪。廻。を。い。ふ。は。
 こ。の。輪。廻。す。も。往。來。ハ。千。也。何。れ。佛。の
 け。ん。ん。これ。佛。光。に。見。解。る。う。へ。も。う。れ。變
 化。の。理。を。い。ふ。も。變。化。の。漸。め。と。い。ふ。は。い。や

はるかにわたりて者れ光にあらざるも。他は愛
れなきものなり。さうしてこれを同じくをいふらば地
のつみだちならぬと云ふこと。陰陽造
他のたゞめを變化して万物との一性命を
与へたるものと古今來帝の理也。聖人乾
坤此二卦に於てその秘をもとせり。んあ
らん人を腰にあづくるべし。よう海をけほそ
ろふを方す。ありて是物これ我にうま
む。よきよし。是実實に道理也。なり
このおれ異端に庸は。いつか風をさす。あ
らう。いつか。いかに。なる。漫然。ある。は
わ。と。なる。

を釈しつるを云々義と云々十卷あり。經の久修を釈
 すのを云々文句と云々十卷あり。其の上は教心のつと
 のつと云々。摩訶止観といふ。摩訶は梵語大也
 翻し十卷あり。止観は三十卷を云々。是より天台
 止観河流の辨舌なれば其説わくつと云々
 けり。章安灌頂筆記と云々。是は妙樂大師
 湛然の云々義を注しつと云々。釈藏と云々十卷あり。文
 句を注しつと云々。疏記と云々十卷あり。止観を
 注しつと云々。弘決と云々輔行記と云々十卷あり。は
 三才卷を末書と云々。合て三大部と云々。
 天台家系図

惠文 思大 智者 灌頂 章安 智威
 惠威 玄朗 湛然 道邃 最澄 傳教
 本師

世乃たつてのまやうなるあり。わいなきがさうなる
 こびりありて。人れりくけり。と云々。あやうなる

夢はうづ〜かな〜
んほむ人云々

口を^ノく
礼記^ノ口容止^ハと云^ハ主^ハ人^ハ不^ハ同^ハ容^ハ不^ハ先^ジ

挙^{アゲ}こつち^コも^モ面^{オモ}へ

人にも我もよろや哉事をのぞこれめろ^{ホト}
 る其の道^{ミチ}をそ夷^{ヒゲス}ハ引ひくよぶあつむ。佛法^{ブツポフ}
 うるまそく連歌^{レンカ}。管絃^{クワンゲン}をうらなふものわ

されどを返らるるをのれり。及ぶ所の様人は無い。
 悔もあべし。法師の事もあはれ。此をこそ教へん。
 上人の心を海とてなす。て武をこの世に人から
 かり。百の戦て百の勝も。いまだ武勇れ。名は
 定る。こそ。まねる。運は。あつて。あつて。を。く。耐。
 勇者。あ。あ。あ。い。人。な。兵。つ。き。矢。さ。か。め。
 て。は。か。な。敵。は。降。る。と。死。を。や。ま。う。て。は。始。て。
 名。は。あ。つ。つ。と。さ。た。ち。あ。い。う。ん。か。で。武。日。
 か。ろ。く。人。偏。ま。う。く。會。戦。は。う。り。ま。う。ふ。
 ね。り。い。そ。家。は。あ。ら。び。の。好。く。益。を。は。も。と。也。

けは師のみものありと云ふなり

中より中あり

夷 多るる面告の武をさうと

上より初 心は人位に在り

武をさうび人位に在り 左傳衛公子伋伋人

之子也 有寵而好兵 又曰 州吁阻兵而安忍 阻兵無

家 安忍無親 家親難離 難離以濟矣 夫兵猶火也 弗

戰 將自焚也

百一 戰 孫子謀攻篇 百戰百勝 非善之善

者也 不戰而屈人之兵 善之善者也

山谷詩 百戰百勝 不戰而屈

兵はさう矢さのありて 司馬遷報任少卿書曰

李陵与匈奴战 单于连战十有餘日 固共攻而固之轉

闘千里 矢盡道窮 救兵不至 卒死 傷如積陵 跡

後時使有来報 漢公卿王侯皆奉觴上壽 後數日 復敗

敵 通鑑綱目第二 劉玄益書法曰 七

國之君 其辭曰 死之上也 執虜次之 以取次之 獲改之

降 為下

人 備 孟子 離婁上

篇曰 爭地以戰 殺人盈野 爭城以戰 殺人盈城 此所謂

くささるつづき也内裏造るもの
じりそぬほを乃こし事あらわと或人
傳也先賢れつる内みけに章
乃けら事のもぞ傳れ

うけの酒氏ふむらぐれぬ。羅れなど
うとものと後ら。倭名唐韻云羅

魯何及此間云羅良云蟬翼系羅也

ふれふれもろろとあり。羅の羅れと
乃。羅へ金紗をふりつる也

頃阿。小野宮大納言能實れは龍也十四歳
正。睿山。修。も。高。の。り。

頃阿とあり。あ歌道とあり。始ふと泰昌

といふ。又。感空とも号し。貞治二年は頃阿七餘
歳。後。普光。周。松。政。良。基。公。問。答。て。近。代。文。集。

うく異風。成を正風。改て後世の電鑑也

と。と。と。其。問。答。を。愚。問。賢。注。と。名。け。右。亮
孝。末。流。鳥。井。小。路。經。厚。が。説。り。

小野宮大納言能實 全春 仁春 仁尋 仁誉 泰壽

頃阿。魚好同時乃人也。其詞をうに。と。殊勝小ゆる
る。ん。乃。び。く。螺。鈿。軸。と。卷。本。れ。軸。に。貝。を

しらへる也。世継とあり。い。や。の。あ。つ。ひ。

屋つゝもどつてらん螺鈿の鏡よこさるもじ

ういふらん地へ踏まわ

おれ字は清てし

弘明僧都

権弘明僧都弘明。文保二年十月北。和方集訓説云。建武比。与。兼。好。房。有。因。縁。故。弘。明。住。時。歳。六。十。一。

いさげず 源氏ぶしひのづととて

似るもあつていふうやうん也

内外れを

内典外典也。佛經を内典とし

儒書百家と外典とす。天台止観にも十陰中

三修け。毛詩と三言めれうらふ篇ち。周礼の

六官とて官け。大学の格物に付かきうら

多し

凡佛書を内典とす。儒書を外典とす。事。浮

屠氏よりいふ私う。天下れは福ふあつて聖

人れたる天下に法とて常とてさきなり

書を經にも典にもあつて經典の二字。これつ

福も後より堯典。皋陶典。これいふ。五經六經に

いふは義あり。浮屠は經を西域より傳

多羅。素怛纒。さんといふを翻譯し。心

あふか一とある。節令の時也年をとつとむる也

洞院大長 洞院實雄公從位在大長山階と号

相國 大政大長はくも也

元龍悔 易乾卦上九元龍有悔家曰元龍

有悔盈不可也。又曰元龍有悔与時偕極元為言

也知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪

月みちてハ 易豐卦日中則昃月盈則食天地盈

虚与時消息 歎名云月缺也滿則缺

物さうわあては 盛者必衰

は、ほれ、理をいふ。鎌倉右大臣實朝初

人のいふをきく。頼朝は太師をきく。あや

しとも。我は右府ふれがんとて終る。后も

位よのがわもなやれ。あに鶴岡は指ては

うて公曉が難小あつた。およつらん人上臈下

臈ふくまうとも竹林の太師はくも。遠近の城

あるべきあや

法顯三蔵は天竺ふらしておつた。鹿をのへて

うおひ。病ようては漢の食をふかひ給けり

法顯傳第三卷惠皎所撰法顯傳曰法顯
姓龔平陽武陽人有二兄並髡髮而亡父恐禍及顯
三歲便度為沙彌居家數年病篤欲死因以送還寺
信宿便差不肯復飯其母欲見之不能得後為立
小屋於門外以擬法身十歲遭父憂叔父以其母寡
獨不立逼使還俗顯曰本不以有父出家也正欲遠塵
離俗故入道耳叔父善其言乃止頃之母喪至性過
父塋事畢仍即還寺嘗于同寺數十人於田中刈
稻時有飢賊欲奪其穀諸沙彌悉奔走唯顯獨留
語賊曰若欲須穀隨意所取但君等昔不布施故
致飢貧今復奪人恐來世彌甚貪道預為君憂耳
言訖即還賊并穀而去衆僧數百人莫不歎服
及受大戒志行明敏儀軌整肅常慨經律并胸
誓志尋求以晉隆安三年于同寺惠景道整惠
應惠鬼等發自長安西渡流沙上無飛鳥下無

法顯 高僧傳第三卷惠皎所撰法顯傳曰法顯
顯姓龔平陽武陽人有二兄並髡髮而亡父恐禍及顯
三歲便度為沙彌居家數年病篤欲死因以送還寺
信宿便差不肯復飯其母欲見之不能得後為立
小屋於門外以擬法身十歲遭父憂叔父以其母寡
獨不立逼使還俗顯曰本不以有父出家也正欲遠塵
離俗故入道耳叔父善其言乃止頃之母喪至性過
父塋事畢仍即還寺嘗于同寺數十人於田中刈
稻時有飢賊欲奪其穀諸沙彌悉奔走唯顯獨留
語賊曰若欲須穀隨意所取但君等昔不布施故
致飢貧今復奪人恐來世彌甚貪道預為君憂耳
言訖即還賊并穀而去衆僧數百人莫不歎服
及受大戒志行明敏儀軌整肅常慨經律并胸
誓志尋求以晉隆安三年于同寺惠景道整惠
應惠鬼等發自長安西渡流沙上無飛鳥下無

走獸四顧茫々莫測所之。唯視日以准東西。
望人骨以標行路耳。屢有熱風惡鬼遇之必
死。顯任緣委命直過險難有頃至慈嶺。冬
夏積雪有惡龍吐毒風雨沙礫。山路艱危。壁
立千仞。昔有人鑿石通路。傍施梯道。凡度七
百餘所。又踰懸紐過河數十餘處。皆漢張騫
甘英所不至也。次度小雪山。遇寒風暴起。惠
景噤戰不能前。語顯曰。吾其死矣。卿可前去。
勿得俱殞。言絕而卒。顯撫之泣曰。本圖不果。
命也奈何。復自力孤行。遂過山陰。凡所經歷
三十餘國。將至天竺。去王舍城三十餘里有
一寺。逼暝過之。顯明且欲詣耆闍崛山。寺僧
諫曰。路甚艱阻。且多黑師子。亟經嗽入。何由
可至。顯曰。遠涉數萬里。到靈鷲。身命不期。
出息非保。豈可使積年之誠。既至而廢耶。雖
有險難。吾不懼也。衆莫能止。乃遣兩僧送之。
顯既至山。日將曛夕。欲遂停宿。兩僧危懼捨
之而還。顯獨留山中。燒香禮拜。翹感舊跡。如
覩聖儀。至夜有三黑師子來蹲顯前。舐展尾搖
尾。顯誦經不輟。一心念佛。師子乃低頭下尾伏。

顯足前顯以手摩之。咒曰。若欲相害。待我誦
竟。若見試者。可便退矣。師子良久。乃去。明晨
還。路窮。出梗。止有一逕。通行。未至里餘。忽
逢一道人。年可九十。容服廉素。而神氣雋遠。
顯雖覓其韻高。而不悟是神人。後又逢一少僧。顯
問云。問者。年是誰耶。答云。頭陀迦葉太子也。
顯方大悅。恨更追至山所。有橫石塞于室口。
遂不得入。顯流涕而去。進至迦施國。有白
耳龍。每子衆僧約。令國內豐熟。皆有信効。沙
明為起龍舍。并設福食。每至夏坐。訖龍輒化
作一小蛇。兩耳悉白。衆咸識是龍。以銅盂盛
醪。置龍於中。從上座至下行之遍。乃化去。年
輒一出。顯亦親見。後至中天竺。於摩竭提邑
波連弗阿育王塔南天王寺。得摩訶僧祇律。
又得薩婆多律抄。雜阿毘曇心經。方等泥
洹經等。顯留三年。學梵語。梵書。方躬自書寫。
於是持經像。寄附商客。到師子國。顯同族十
餘。或畱或亡。顯影唯已。常懷悲慨。忽於王像
前。見商人以晉地一白團扇。扇供養。不覺悽
然下淚。停二年。復得沙塞律長雜二舍。及

雜藏本。並漢土所無。既而附商人。大舶循海而還。舶有二百許人。值暴風水入。眾皆惶遽。即取雜物棄之。顯恐棄其經像。唯一心念觀世音。及敗。余漢土眾僧。舶任風而去。得無傷壞。經十餘日。達耶婆提國。停五月。復隨地商東適。廣州。拳悅二十餘日。夜忽大風。合船震懼。眾咸議曰。坐載此沙門。使我等狼狽。不可。以一人故。令眾俱亡。共欲推之。法顯相越厲聲呵商人曰。汝若下此沙門。亦應下我。不尔便。當見。然漢地帝王奉佛。敬僧。我至彼告王。

必當罪汝。商人相視失色。僊恍而止。既水盡。糧竭。唯任風。随流。忽至岸。見葵藿菜。依然知是漢地。但未則何方。即乘船入浦。尋村。見獵者二人。顯問。此是何地。耶。獵人曰。此是青列。長廣郡。穿山南岸。獵人還。以告太守。太守疑。素敬信。忽聞沙門遠至。躬自迎勞。顯持經像。隨還。頃之。欲南。取青列。刺史請留過冬。顯曰。貧道投身於不及之地。志在弘通。新期未果。不得久停。遂南。造京師。就外國禪師。仁獸跋陀。於道場寺。遷出。摩訶僧祇律。方等。涅槃經。

雜阿毘曇心要百餘方言。顯既出大波直。流布教化。咸使見聞。有一家失其姓名。居近朱雀門。世奉正化。自寫一部。讀誦供養。無別經室。子離書。共屋後。風火忽起。延及其家。資物皆盡。唯沿直經像。然具存。煨燼不侵。奉色尊設。京師共傳。咸歎神妙。其餘經律未譯。後至荊州。卒於辛寺。春秋八十有六。眾咸憫惜。其遺履諸國。別多太傳焉。

丁卯經廣字。高僧法顯傳一卷。東晉沙門法顯撰

法顯到獅子國。一僧伽藍。名無畏山。有五千僧。起一佛殿。金銀刻鏤。悉以衆宝。中有青玉像。高三丈許。通身七宝。焰光威相。嚴顯非常。所載右掌中。有一無價宝珠。法顯去漢地積年。所交接悉異域人。山川草木。舉目無舊。又同行分投。或流或亡。顧影唯已。心常懷悲。忽於玉像邊。見商人以白絹扇供養。不覺悽然。淚下滿目。

編年通論第四。東晉義熙七年。法師法顯自西域還。初顯至獅子國。同伴皆無存。顯

然^ト自^レ止^ム會^ハ有^リ以^テ純^ニ廟^ヲ供^ス佛^ニ者^ハ顯^ニ見^ル之^ヲ動^ス東^ニ歸^ス
之^ヲ思^フ

聖

こゝろは支那をきく

漢^カ代^ノ食^ヲ支^チ那^ノと^シ唐^カ虞^ノ三^ノ代^ノと^シ下^ニ之^ヲ明^シ
至^ルは^モて^モ數^ニ子^ノ年^ノに^テ代^ノを^シ号^ヲお^ケる^ヲは
あ^リて^モ漢^カと^シ唐^カと^シひ^テ支^チ那^ノの^ノ地^ヲも^シす^ル
事^ハ漢^カを^シて^モ四^ノ百^ノ年^ノに^テあ^リて^モ李^ノ唐^ノ
と^シ三^ノ百^ノ年^ノは^モな^リお^ケる^ヲも^シ盛^ニん^ニて^モり^テ
号^ヲと^シす^ル也^ハ意^ハ朝鮮^ノ人^ノ崔^ノ溥^ノ漂^ニ海^ニ歸^スと^シて
和^ハ漢^カと^シひ^テ倭^ノ唐^ノと^シひ^テ義^ハ我^ノと^シり^テ
人^ハは^モ國^ヲ他^ノ國^ノを^シる^ヲ春日^ノ明^ノ神^ノ乃^ハ託^ニ宣^ス國^ノ
と^シ我國^ノの^ノ他^ノ人^ノと^シ我^ノ人^ノと^シり^テ

人^ハ乃^ハあ^リて^モな^リい^ハる^ヲは^モ偽^ニる^ヲと^シて^モあ^リて^モ
と^シる^ヲも^シな^リて^モ正^ニむ^ノ人^ノを^シる^ヲも^シて^モの^ノ
も^シて^モは^モは^モる^ヲは^モ人^ノの^ノ賢^ニを^シる^ヲも^シて^モあ^リて^モ
尋^ニ常^ニ也^ハと^シて^モな^リる^ヲは^モ人^ノた^リと^シり^テ

惟南子曰。狂者東望。逐者東望。東望則同。所以東望則異。
 惡人之心。亦如之。
 楊子法言曰。人之性也。善惡混。
 脩其善則為善人。脩其惡則為惡人。
 驥を学ぶと
 楊子法言曰。驥を馬に学ぶと
 棄也。驥親く人。而親く徒也。
 愛を学ぶと
 孟子滕文公上云。親関曰。舜何人
 也。予何人也。有為者亦如是。

驥を学ぶ

楊子法言曰。騊駼トウトウ之馬ヲ。垂騊キ之

學子學

孟子滕文公上云親閑曰彛何人

也。予何人也。有為者亦如是。

孟子告子下。曹交問人皆可以爲堯舜有諸。

孟子曰。堯舜之道。孝弟而已矣。子服堯。服堯。誦堯。言堯。行堯。子服桀。服桀。誦桀。言桀。行桀。

行ハナ華カ々行ヲ是禁而巳矣

惟^{モト}繼^ツ中納言^{ナナノリ}風月^{フウゲツ}れ才^{サイ}とある人也。一生^{シヤウ}精^{セイ}進^{シン}して後^{オチ}継^{キヤウ}よりして寺^{テラ}法師^{ホウシ}の因^{エン}伊^イ僧^{ソウ}と^{ゴト}同^{ドウ}宿^{シュク}して侍^{サマヘ}るる月^{ツキ}文^{モン}保^{ボウ}より三井^{サンミ}寺^{テラ}屋^ヤより^{ヨリ}時^{トキ}坊^{ボウ}主^{ヌシ}よりあひて^{アヒテ}坊^{ボウ}を^ヲぞくして^{シテ}法師^{ホウシ}と^トいふ^{イフ}なり。

一、そのやうなものと、いふれども、いふべきは秀句也。

惟^{ユヱ}繼^{ツグ} 一、そのやうなものと、いふれども、いふべきは秀句也。

平氏^{ヘイジ}西^ニ同^{トウ}院^{イン}嫡^{ダク}流^{リウ}也^デ。元^{ゲン}徳^{トク}二^ニ年^{ネン}。任^ニ權^{ケン}中^{チュウ}納^{ナツ}言^{ゴン}。建^{ケン}武^ブ二^ニ年^{ネン}。任^ニ文^{モン}章^{シャ}博^{ハク}士^シ。曆^{リキ}應^{オウ}五^ゴ年^{ネン}出^{シュツ}家^ケ。七^{シチ}十^{ジュウ}六^{ロク}歳^{サイ}。法^{ホフ}名^{ミナ}。

宴^{エン}儀^ギ。康^{カウ}永^{エイ}二^ニ年^{ネン}。四^シ月^{ゲツ}十^{ジュウ}八^{ハチ}日^{ニチ}。卒^{ソツ}七^{シチ}十^{ジュウ}八^{ハチ}歳^{サイ}。

風^{フウ}内^{ナイ}の才^{サイ}。詩^シをみ章^{カウ}は才^{サイ}也^デ。そのまゝに。

さうなふ多くある義也。

園^{エン}伊^イ僧^{ソウ}正^{セイ} 伊^イ平^{ヘイ}大^{ダイ}細^{サイ}を孫^{ソク}也^デ。風^{フウ}雅^ヤ集^{シュ}も。

前^{サキ}推^シ僧^{ソウ}正^{セイ}園^{エン}伊^イの思^シ侍^シ恋^{コイ}れんをよめる。

宵^{ヨシ}はるの影^{カゲ}人^{ヒト}めははるめとぬはつとぬはれ

てういふ

文^{モン}保^{ボウ} 花^{ハナ}園^{エン}院^{イン}は年^{ネン}号^{ガウ}。文^{モン}保^{ボウ}元^{ゲン}年^{ネン}。四^シ月^{ゲツ}二^ニ日^{ニチ}。

寺^ジ法^{ホフ}師^シ 花^{ハナ}園^{エン}院^{イン}は年^{ネン}号^{ガウ}。文^{モン}保^{ボウ}元^{ゲン}年^{ネン}。四^シ月^{ゲツ}二^ニ日^{ニチ}。

三^{サン}井^{セイ}寺^ジの事^{コト}あり。

秀^{シュウ}句^コ 秀^{シュウ}逸^{イツ}の詩^シをみ章^{カウ}は才^{サイ}也^デ。そのまゝに。

あゝその謝^{シャ}詞^ジは戯^{ゲキ}言^{ゴン}あり。

下部は酒のしほり事からいへば、もと也宗
治は、佐けりをのこ。京も具覚坊とて、なほ
め、ころ道せれ僧を。下うとあり、なほ
常よりむつびきり。或付、逆馬を、
うわたり、おこなり、なほ、口は、
乃こ、先て、なを、せ、酒を、
それ、け、う、こ、飲、た、
も、て、ひ、く、な、れ、
て、が、て、け、は、本、
た、は、師、乃、
ふ、お、男、き、り、
あ、さ、さ、さ、さ、
それ、人、皆、大、
具、覚、坊、も、
ころ、考、は、
それ、お、
な、お、
し、と、
お、ひ、

人たうちもあつて我ううらうらうといひ
 てぞちがうつゝちるふちまのくもあつて
 しくもあつておちるうらうらうに馬の血
 まて宇治大路のまよつちうらう海し
 くてまのこもあつてうらうらうの具
 ちるうらうらうにうらうらうの具
 てうらうらうはうらうらうの具
 と指さされてうらうらうの具

下都ふ 下都ふ

人たうちもあつて我ううらうらうといひ
 くてまのこもあつてうらうらうの具
 ちるうらうらうにうらうらうの具
 てうらうらうはうらうらうの具
 と指さされてうらうらうの具
 下都ふ 下都ふ
 人たうちもあつて我ううらうらうといひ
 くてまのこもあつてうらうらうの具
 ちるうらうらうにうらうらうの具
 てうらうらうはうらうらうの具
 と指さされてうらうらうの具

うん 万葉の現心あり。源氏類聚。

うん 万葉の現心あり。源氏類聚。

まげて 枉の字也。理をよきてとまげらる也。

くらけ原 木幡のまげらる。

わが 新古今和歌のまげらる。木幡山あり。

いふいふとち 呻吟

或者小野道風あり。和漢朗詠集。

持よりうをを人相伝う事。

もち付く。あれ。西條大納言。

うねの波る風。むじと。時代やふい付。

みん。そ。あ。う。と。い。い。それ。い。い。い。

い。い。あ。う。と。い。い。それ。い。い。い。

道風 河海云。本工頭。小野道風。正四位下。

後案守孫。大宰。大戴。葛。絃男。

後四位上。木工頭。道風。朝臣。寛平五年。生。村上天皇。

三十一

一説云。延喜五年生云、

清お傳うも侍事よ お傳實^{サツ}なるべし
てらあうと也ううふ浮^{マホ}虚^キれをうへし

公任卿

公任^{ミナト}狠也。康保三年^ニ生^ル。百壽寺三

年分道時三十一歲

道風死去。公任誕生。九年也。

公任の掟

公任の撰せんもろ下巻あり。

昔ハナをうそでいひつゝる人ニ
目々人ニ

の詩

人の詞を撰

ふよるゝ和漢と

号しる。文と我と我故よ云り但和歌を

公ミヤウイ任ニ己ニ後ノのノ人ハ也ナリ加カいニしテうニ世ヨリ傳ハル大オホ二ニ條ニ関ケル白ハク教キョウ

通^{ニキ}を^イ聲^{セイ}君^{クニ}と^ニて^ニ朗^{ラウ}詠^{エイ}を^ニ出^{ヒキ}し^ニて^ニお^ニよ^ニと^ニれ

うゐとん

道風が朗詠ハ義之が千字文といふ事也。千

字の梁武帝リヤウブテイ此コノ時トキ周シュウ無ム嗣コが作ツクリるを武帝

此鐘繇王羲之の内一千字をとりし

あつてお字又を寫し、あそは或へ極み

一、^ミ開くはよくわて、^イ石摺^サを^キ義^シ之^カう^ニ千^チ字^ジ文^ンと云。

義之死ニて武帝ウダイ生ウマるマ時トキ久キウしシ百ヒャク年ネンニああれり

は後世にわろろのこゝろに成にけり
はつらこれに物類人の編らる筆苑雜記と
見ゆわににちゆ

少日与同学三人遊山寺見一畫佛題其上曰孔子
是道子畫種載書或曰古畫必妙蓋袖而云哉有
強料事者曰孔子周人也漢明帝時佛法始入中國謂
孔子讀佛無理且吳道子唐人也安有吳道子畫而孔
子預乎種載生於千歲之後安得与孔子同時而書所
著之預乎必後世好事者所為也子等皆年少不料
事信之居於一貴公子家見此畫乃稱古今第一而
為畫譜之首予審諸視之則所謂孔子預者列子
所言孔子曰西方有大聖人名曰佛不言而信無為而化
之說也種載取而畫之前自強料事者之言可付
之一笑後世不知本末而強解事者皆此類也
又案說苑曰宋愚人得燕石藏之以為大寶周客
聞而觀之主人示之曰端覽玄服發室華櫃十重提
中十龍客見僂而掩口胡盧而笑曰燕石也主人大
怒曰盲瞽之言藏愈固守愈謹

乃^{アキコ}のしる^コ。廟^{アキコ}小^コ貌^コな^コ。懷^{アキコ}お^コう^コも^コ。
水^{ミヅ}入^{ミヅ}ぬ^{ミヅ}希^{ミヅ}る^{ミヅ}。た^{ミヅ}し^{ミヅ}め^{ミヅ}の^{ミヅ}は^{ミヅ}り^{ミヅ}。
く^{ミヅ}も^{ミヅ}入^{ミヅ}る^{ミヅ}。ひ^{ミヅ}も^{ミヅ}大^{ミヅ}な^{ミヅ}く^{ミヅ}。
を^{ミヅ}あ^{ミヅ}て^{ミヅ}。び^{ミヅ}付^{ミヅ}く^{ミヅ}る^{ミヅ}。
猫^{ネコ}。和^ワ名^ナ猫^{ネコ}。音^ネ齡^コ福^フ。善^シ捕^ポ鼠^ソ也^ヤ。

金花^{キンカ}猫^{ネコ}。其^キ方^ハり^リ猫^{ネコ}。わ^ワけ^ケて^テ婦^フ女^{ニョ}を^ヲわ^ワて^テ。
頗^オる^ル。その^{ソノ}雄^{オス}猫^{ネコ}。小^コな^コな^コる^ル。雄^{オス}を^ヲこ^コろ^ロ。
し^シて^テ。こ^コを^ヲ治^チす^ス。雌^メ猫^{ネコ}。小^コな^コる^ル。雄^{オス}を^ヲこ^コろ^ロ。
こ^コへ^ヘ。こ^コを^ヲ治^チす^ス。い^イつ^ツと^ト。續^{ツグ}耳^{ミミ}談^{ダン}。月^{ツキ}令^ニ廣^{ハル}。
其^キ方^ハり^リ猫^{ネコ}。わ^ワけ^ケて^テ。

行^{ギョウ}願^{ガン}寺^ジ。元^{ゲン}亨^{コウ}。教^{キョウ}書^{ショ}云^{クニ}。行^{ギョウ}因^{イン}鎮^{チン}西^{セイ}。寛^{カン}弘^{コウ}二^ニ年^{ネン}。

遊^{ユウ}帝^{テイ}城^{セイ}頭^{トウ}。戴^{タイ}宝^{ホウ}冠^{クワン}。身^ミ披^ヒ革^{カク}服^{フク}。都^ト下^カ呼^コ為^ニ革^{カク}上^{カウ}人^ニ。於^オ其^キ所^{ショ}。
花^{ハナ}神^{カミ}祠^ニ側^ニ。當^{トウ}行^{ギョウ}願^{ガン}寺^ジ。安^{アン}千^{セン}手^{シュ}像^{ゾウ}。以^{ヨリ}因^{イン}衣^イ革^{カク}。俗^{ゾク}呼^コ行^{ギョウ}願^{ガン}寺^ジ。

為^ス革^{カク}堂^{ドウ}。

松^{マツ}も^モゆ^ユり^リ。松^{マツ}明^{メイ}也^ヤ。

連^{レン}歌^カの^ノも^モの^ノ。賭^{カシ}。

や
安良庵と云ふ

袖もあはれ
もろもろ
めし侍^{ヲカ}たり

此頃の意^{コロ}は^{キウ}官^{トビ}つめ^{コウカク}る

美し只々さう人となつて地獄へ入る

とつやも人^にお^のの衣^ををさうかど人

よこしなぐれおき^系くみ^系ぶ^系ど云事わ

相國クニノミヤ寺テの横ヨコ川カハ和尚ヲウショウよキもコ篇ヘンよモト目メの字ジにハあハる

づもれ文字モシと傳ツふと人の言トヒ々れシはシふシふシ

はたわもくは^ミあはれ^ハ相^{サウ}の字^ジも^ミの字^ジ

なりといふ時よりなり人相國寺

乃相^マの字にあづ^マと^マされ横川大^マ

わづなち

但盤經諸行無常是生滅法生滅之已宋滅為樂

天台四門有門空門非有非空門亦有亦空門

物之幻化也 國覺經幻身滅故幻滅而滅

幻滅之故非幻不滅

何事之幻化也

和氏之璞空也

幻也

吉日之要也必凶也

吉乃吉之吉也凶乃凶之凶也

必凶也吉乃凶也

吉乃吉之吉也

事父類聚前集十二沉類時日無吉凶辨云古者

國家將有事乎我必先祝時日以定其期且用備

物於有司習儀於祀寺俾臻其禮而戒其誠非所以

定吉凶決勝負也後之惑者不詳其故推考時日妄

生災孽斯風不革指忌益深至使凡庶之家將欲赴

一海皇折一葭草必待擇日而後為之揖一衛宇難一

椿無必之雷方位而後為之且吉凶由人焉豈余時日之

四達之衢輪蹄未嘗息也五都之市貨賄未嘗終

也乃家之邑之市之常也七雄之世戰伐未嘗已也

其凶也必由於人其吉也必由於人故士人凶其吉凶人

吉其云。一於人所為。而多然則惑者不知其在人也。
有一不吉則罪於時日矣。且以不謀之將不練之士。
有能計時勝者乎。不耕之土。不實之谷。有能以時自
種者乎。以鉄為金。以石為玉。有能計時自種者乎。是皆不義
也。則時日於人何有哉。夫王者以兵以德勝。霸者以兵以
義勝。其次以智。其次以勇。故古之名將。未嘗不以計而戰
勝也。未嘗不以計而成功者也。

羅浮子嘗應或人之求而著軍書題後。其中論時日
其畧曰。孫子之論兵。有九焉。其一日天。二曰地。三曰人。四曰
時。五曰法。六曰地。七曰人。八曰天。九曰地。此九者。皆天
時也。言用兵者必順乎天時也。冬者。天時也。夏者。地時也。

時也。時制者。陰陽四時之制。所謂時日又千。孤虛壬相
之說。起自風后。及范蠡之占歲。此其流傳。
傳。可知也。則豈反可悉廢哉。然今姑以不避陰陽拘
忌者。按舉之。夫往亡之日。無家所忌。晉武帝曰。我往彼
亡。吉孰大焉。遂平慕容氏。甲子者。紂所亡。其家忌之。
後魏武帝曰。紂以甲子亡。武王以甲子勝。遂破如貝驂。
鄧禹以甲子窮日理兵。以敗劉歆。劉裕不避折咎。千
禧。以甲子以擊。盧循而克之。皆是也。公折著。毀龜
之道。意也耶。尉繚子曰。黃帝刑徒者。人事也。而
孟子曰。天時不如地利。地利不如人和。言盡于此而已耶。

然又有一理。康節先生出行。自或告之以不利。則不行。蓋曰人言則不知。既言則有知。而必行。故鬼神敵也。是亦可不思乎。嗚呼。時日用。存於其人矣。



